

「喜寿を迎えて」

2018年04月19日

私は今日、喜寿を迎えた。77年も生きて来た訳で、それなりの感慨がある。小さな人生であったが、私らしく生きてきたので、「よし」とせざるを得ないが、よくも生かされてきたとも思っている。私は、旧満州の大連市で生まれ、5人兄妹の末っ子として育った。下に弟がいるはずであったが、戦争末期、母は過労だったのであろうか、産み月に、路面電車の中で倒れ、病院に運ばれたが、死産であった。そのため、末っ子となった。家族には愛された。長兄に「隆雄は秋吉家の子どもではない、橋の下から拾ってきた子どもである」と言われ、母の膝で大泣きしたことを覚えている。そのように愛されたのである。旧満州での思い出は、断片ながら数々ある。敗戦前と後では、生活ぶりが違った。敗戦前は、落ち着いて暮らしていたが、敗戦後は、父は職を失い、生活が一変した。兄が中国人にさらわれ、大騒ぎをして捜し回ったこと、ロシア兵が時計を出せと土足で踏み込んできたこともあった。引揚げに際し、家具などを道路に並べ、売ったりしていた。引き揚げて帰国する時は、テレビで見る難民のように行列して歩いた。貨物船に乗り、1947年2月に佐世保に着いた。緑の山々を見て、これが日本かと思った。上陸した時「男は残れ」という声があった。男のつもりだった私は残っていたが、母と兄妹たちは先に進んだ。ついて来ない私に母が、「隆雄ちゃん、来なさい」と呼んだので、「『男は残れ』と言ったよ」と答えたのを思い出す。「男」は家長を指すのだと知った。

父の故郷の大分県速見郡八坂村中村に着いた。親戚の人が駅に迎えに来てくれ、白米のおにぎりを食べた。大連では、コーリャンしか食べた記憶がないので、白米のおにぎりは忘れられない美味しさであった。それから、土地も財産もない貧しい引揚者として生活が始まった。家族7人を養う両親の苦労は並大抵ではなかった。しかし、子どもは別の生活を知らないし、周りの人たちも貧しく、こういうものだと思っていた。我が家は、いわゆる文化的なものはなく、生活に追われ、家族全員懸命に働いた。働くことは当然で、怠けることに私は罪悪感を持つようになった。子ども時代は元気で、学校では人気者であった。小学校時代は、貧しい者の味方で、しわがれ声の浅沼稻次郎が好きで、ラジオの政治討論をよく聞いていた。だから、政治家になりたいと思っていた。中学時代、小説を読むようになって、心の世界に目を開かれた。太宰治に惹かれ、埋没した。小説家になりたいと思った。高校生時代、自我に目覚め、内面化していった。心と体の成長のバランスを壊し、鬱に陥っていった。自己肯定できない、社会にも魅力があるとは思えない。生きる意味を見出そうともがいた。仏教しか身近になかったので、お寺に救いを求め、町の知名の士が集まる「仏教研究会」に熱心に通い、お坊さんになろうと思っていた。しかし、自己肯定できないにもかかわらず、「私であること」にこだわり、仏教の教えに納得できなかった。住職に勧められ、教会に初めて行った。牧師の蔵書に驚いた。牧師の勧めで、聖書とキリスト教の本を貪るように読んだ。私の知らない広く、深い世界に魅せられた。どんな人であっても、その人を受け入れ「私であってよい」というイエス・キリストの言葉と業に光を見出した。この方を信じ、人生を託して生きようと、牧師への道を歩んだ。

数年前、アカシアの花の咲く頃、大連市を訪ねた。アカシアの花の香りが懐かしかった。住んでいた社宅が取り壊され、残っていた一棟を見ることができた。当時のままの大和ホテルの回転ドア、路面電車、星が浦の海岸、香りの強いりんごなども懐かしかった。

喜寿を迎え、大連での幼い頃と、神学校入学までの郷里での13年間は短いけれども、私の人生を決定的にした人格形成時だったと、その意味の大きさを思い起こしている。